

天文管關卷下に楢圓のことを斜規又は連根截と名づけてゐる。

六曜ノ行道皆正規ニアラズ、名ケテ斜規ト云、師長ナル形ノモノヲ斜截タル端口ニ同ジ、斜規又連根截ト名ケ、云々

斜規 阿蘭陀語 計依計留須念依田、計留須念依田、蘭質字依留毗喜論度 以上三名

又刺的音呼爲依立夫須とある。刺的はラテンである。

焦點は曆象新書と同じく隣と名づけ
隣 南阿留片度 一名 武蘭度片度

としてゐる。

東北帝大所藏の晴雨考に就いて

平 山 藩

序に楢圓の語について一言を附け加へておく。

和算では關孝和以來側圓の語を用ゐ、支那では梅文鼎の曆算全書に楢圓の語がある。松永良弼の辨老餘算草術に側圓を「楢圓、促圓、縮圓、延圓ともいふなり」とあつて、我邦で初めて楢圓の字面が出てゐる。松永の書には曆算全書にある術語、紐數（二整數の最大公約數、普通等數といふ）平行等の語が見えるから、恐らく楢圓と共に曆算全書に依つたものであらう。後年になつて白石長忠は曆算全書にらひて側圓を楢圓とすると判然と斷つてゐるが、松永より白石までの間に楢圓の語を用ゐたのは曆象新書だけである。

前號神田氏の文中に東北帝大にあるが未だ調査してゐないと言はれる晴雨考について記すと次のやうである。

嘉永三年庚戌歲晴雨考 仙臺書肆雲華房發兌 齊政館都講鈴木圖書序 土御門殿御門人、奥陽仙臺掌天學士、武田崑崗・村田尺蠖子著 仙臺司天家藏板 書林國分町十九軒、伊勢屋半右衛門發行

嘉永六年癸丑歲晴雨考 著者名を缺く、其他は右に同じ

安政六年己未歲晴雨考 土御門殿御門人、奥陽仙臺掌天學士、

村田尺蠖子・古山漸齋著 其他は右に同じ

以下すべてこれと同じ

安政七年庚申歲晴雨考

萬延二年辛酉歲晴雨考

文久二年壬戌歲晴雨考

文久三年癸亥歲晴雨考

（明治二年己巳歲晴雨考の著者は村田尺蠖子・志村北臺となつてゐる）

尙東北帝大には寫本ではあるが次のやうなものがある。志村恒憲のものらしい。

壬晴雨日記

文久三晴雨日記

癸亥年

文久四年甲子改元有晴雨日記
元治元年ト相成

類書には次のやうなものもある。

安政三年丙辰運氣造 志村恒憲撰 (寫本)

運氣考抄略 (寫本)

晴雨考類版の所在について

神 田 茂

本誌前號で主として名古屋版の晴雨考について調査の結果を記述した處、大矢眞一、平山謠兩氏からその類版について種々御教示を受けた事を厚く感謝する。前號寄書欄で運氣考、雲氣考、氣候懸斷録、勸農晴雨談提要等の名で刊行されてゐるものが晴雨考と類似の内容のものである事を大矢氏が指摘されたので、これ等の書物の所在を調査して見た處、運氣考、氣候懸斷録の二種は大矢氏の紹介された以外に數本の所在が判明した。

運氣考

安永八年 第八高等學校下郷文庫、井本文庫

同 九年

寛政二年 下郷文庫、小田尙文堂目錄

寛政四年

井本文庫、帝國學士院 (寫本)

東北帝大所蔵の晴雨考に就いて (平山)

以上東北帝大所蔵

寛政四運氣考 (寫本)

年壬子運氣考

帝國學士院蔵
尙は神田氏の記事中にある『日用晴雨管窺』は帝國學士院に

り、その著者は氏の推定通り棚橋泥尾子である。又『天文候鑑』

は東北帝大にあり、棚橋泥尾子撰、深井短梗子校、尾州名古屋本

町七丁目永樂屋東四郎刊である。

下郷文庫所蔵のものは江匡弼撰との事であすから大矢氏紹介のものと同じである。安永八年井本文庫のものは井本進氏の御厚意により借覽の機會を得たが、最初に土御門家御免とあり、序及び本文の最初に菊丘臥山人江匡弼文披撰とある。内容は五運六氣の説により年中の晴雨を判斷してゐる事晴雨考と同じである。巻初に中川文化堂蔵版とあり、終に皇都書林堀川蛸薬師下ル町中川藤四郎蔵版とある。津市山田尙文堂目錄「古書蒐集」己卯第一輯(昭和十四年十一月)に「庚子運氣考中形一册」とあるものは現在の所在は不明であるが附記する。

寛政四年の井本文庫所蔵のものは同じく中川文化堂蔵版のものであるが、序文が少しく變つて居り、延景齋精果題とあり、本文の始に武田九龍子撰とある。平山氏も挙げて居られる帝國學士院